

【にんげん部門(高校生) 中外日報社賞】

キャスト、私

敦賀高等学校 3年 岸本 季也

クラスメイトと話している時、無意識に相手に合わせた返答を選んでいる私がいることに気づいた。思ってもいない上っ面だけの言葉達が、私の口から溢れていく。これは多くの人がしている事で、特段気に留めるようなことでもなかったんだろう。でもその時の私には、自分を押し殺してまで人に合わせている自分自身が、心底気持ち悪いモノに思えた。

そんな自分を見つけた時から「人前にいる時の自分は嘘。一人のときだけが本当の自分だ」と考えるようになった。でも、どこかに違和感もあった。友達と笑い合った時間や感情、それすらも作られたものなのだろうか。人は沢山の仮面を持っていて、相手との関係性によって違った顔を使い分けている。その全てが作られたものだとするのなら、「本当の自分」は一体どこにいるんだろう。

一人でいるとき、私は何を考えているのか思い返してみると、友達、今日の出来事、進路…他者の影があるものばかりだった。誰もいない時でさえ、私は誰かの視線を感じている。仮面はいつの間にか、人前だけでなく、私の内側にまで根を張っていたのだ。私はずっと、自分の中にいる誰かに向けて「私」を演じ続けていたのかもしれない。「本当の自分」が分からなくなったら同時に、自分が抱いていた幻想と漸く正面から向き合えた気がした。

ずっと「本当」を考えてきたけど、今はむしろその言葉が、私を縛る鎖のように思えた。私はまだ未熟で、搖らぎや迷いもあるし、完璧じゃない。でも、今はそれでいい。そう思えたとき、私を蝕んでいた息苦しさが、少し緩んだような気がした。どの私も少しずつ本当で、少しずつ嘘。それでもそこに私の意思がある限り、私は私で在り続けるはずだ。

私は沢山の仮面を持っている。これからも、それを使い分けながら生きていくんだろう。そこに嘘があったとしても、感じた痛みや喜びは、まぎれもなく私だけのものだ。